

# 「夢の舞台全中」

帯広市立帯広第一中学校  
女子バスケットボール部  
監督 高島 恵樹

素晴らしい選手達との出会いと日々の努力継続により、私にとって5回目の全国大会参戦となる広島全中に出場する事が出来ました。

言うまでもなく特に全中の素晴らしさは、全てのカテゴリー中で最もエントリー数が少ない狭き門である事、コートにはバスケットボールのみのライン表示であり、歓迎の挨拶も大会役員から補助生徒までが「おはようございます、こんにちは」ではなく「おめでとうございます」と言って頂ける事（特に今回の広島全中は連日猛暑にも拘わらず、屋外駐車場の役員、補助生徒全員が炎天下の中で必ず立って礼をして下さり、感激しました）、審判レベルが高い事（全中は殆どが1A以上／私は5回の全国大会でジャッジに違和感やストレスを覚えた事が殆ど無い／それほど巧いという事）など色々ありますが、私は何が幸せかって、中学校生活のすべてを「バスケットボールに賭けた者達だけの世界」である事と同時に愛する選手達と日本のすべての学校（チーム）の中で最も長く部活動が出来る事が何よりも幸せであり、これこそが『夢の舞台』と言われる所以であると考えます。

残念ながら全国大会成績は予選ブロックリーグ敗退となってしまったものの（ましてうち以外の北海道代表校は揃って決勝トーナメント進出を果たしているが）、八王子第一の桐山先生、若水の杉浦先生という日本の中学校女子バスケットボール界の両巨匠と戦い、八王子第一とは終始激戦、優勝した若水とも第1Q、19-24とほぼ互角に戦え、広島で多くの方々から「もし他のブロックなら決勝T進出は間違いなく、ベスト8以上を狙えるチームですね」「驚きました、どうやってこのチームを創ったのですか」等の実に数多くの称賛を頂け、これまでの努力が間違っていなかった事を確認出来、胸を張って北海道に帰ろうと思えました。

今チームの経緯を振り返り、まずチーム創りのコンセプトとしては過去4回の全中出場チーム、まして北海道を連覇し、全国大会でも決勝トーナメント進出を果たした平成15・16年のチーム創りは私の宝物ではありますが、どうせやるならと敢えて全く違った方法に挑戦してみました。具体的には、ディフェンスは特にマン・ツ・マンDFを重視し、今までの私の方法に大きなシステム変更を試みました（北海道大会決勝で今までファウルアウトを経験した事がない選手＝抜群の脚力でマンDFが優れている選手までもが早々にファウルトラブルとなり、ゲームを壊した事からこのM・MDFは成功とは言えないかもしれないが、正直言うと別な問題だと私は感じている＝現に全国大会では同様のDFでまったく問題無く、気持ち良くDFが出来たと選手本人も言っている）。最大の挑戦はオフェンスで、簡単に言うと教える順番を逆にしてみました。過去の全中経験より、とにかく攻撃力（得点力）の差が北海道と全国常連校の違いであると感じていたからであり、さらにサイズはリクルートチームには絶対に敵わないという悪条件下でも互角以上に得点する方法を模索して辿り着いたものが今チームの最大の柱でした（八王子第一と最後まで勝負出来た事、さらに若水とも高見以外のチームで最も戦えたと評価された事からもこのオフェンスづくりは成功だったと感じている）。

昨年度の北海道大会経験後、北海道新人北大会を二連覇、同南北決戦準優勝とチームは概ね順調に育っていた矢先の今春4/11にエースセンターがアキレス腱断裂という大怪我をしまい、ツーポスト・スリーメンモーションにおけるインサイドの大黒柱を失いました。アキレス腱断裂は全治六カ月以上。常識では夏の全道・全国は絶望的であり、私は目の前が真っ暗になりました。怪我後わずか5日で

北海道カップ出発。今まで培ってきたチームプレイが全く出来ない状態で、私も選手も意気消沈の苦しい大会参戦でした。

五月（GW）に東日本選抜大会参戦で秋田遠征を計画してましたが、北海道カップ同様とても楽しみにしていただけに余計に行きたくないという気持ちにも正直なりました。

ただどんなに苦悩しても怪我が治る訳でもなく、エースセンターを失ってもどうやってチームを創りなおすかを主題に秋田遠征出発。初めて行きましたが、びっくりするほどの田舎で（コンビニもなく）、しかしながら体育館は実に立派でいつも満員。聞いてはいましたが、能代市を中心に秋田県（そして東北地区）のバスケットボール熱を強く感じました。大会役員は殆どが能代工高出身者で、実に目が肥えており、お話していて勉強になる事が多く、勿論エントリーが許されているどのチームも強く、そして熱い指導者ばかりでしたが、幸いな事に初出場ながらもなんとか優勝する事が出来（北海道のチームで優勝したのは、H19年の旭川緑が丘中以来二回目）、ずっと苦しい毎日だった中での久々の明るい話題となり、そしてここでは記しませんがもう一つ大きなテーマを持って行っていた為に東北の強豪校に勝ち抜き、東日本選抜大会初優勝は大きな財産となりました。

アキレス腱断裂の選手（保護者も）の懸命の治療努力により、もしかしたら夏に間に合うかもしれないという可能性が出てきました。しかし、コーチとしては期待（計算）せずにチームを創り直すしかなく、具体的にはワンポスト・フォーメンモーションにセットアップ変更するか、セットアップは変えずに選手のポジションコンバートするかの二通りの方法を選択をしなければならなく、熟考の末、後者を選びました。エースセンター不在でも北海道チャンピオン獲得を目指しての日々となり、それは本当に苦難の毎日でした。

結果的には北海道大会にはやはり間に合わず（全国大会に本人を出場させる為に少しだけゲームを経験させた）、道新人北大会、道新人南北決戦大会の決勝を常に戦ってきたライバル校である神居東中に破れ、準優勝に甘んじました。ただ、センター不在でも優勝する為の努力を継続してきたので、主力選手の怪我が敗因ではないと私は考えています。

いよいよ全国大会。若水と八王子第一と同ブロックという全国大会組み合わせ見た時、私は戦慄し、そして楽しみとなりました。北海道第二代表となった時から全中での厳しい組み合わせは想定していましたが、よりによって若水と八王子第一と同ブロックとはまさに痺れました。三月の Jr, AS 大会で愛知の若水、福岡の高見、新潟の鳥屋野、東京の八王子第一と東村山、三重の朝明等が夏の有力チームと見えていたし、やはり杉浦先生、桐山先生と対戦させて頂くのは実に幸せな事であり、同時に勝負であると決心しました。廿日市市での公開練習時、杉浦先生、桐山先生に「お二方とゲームさせて頂くのは大変嬉しく、光栄ですが、別に同じ日にやらなくても私は良かったんですよ（笑）」と三人で歓談し、翌日の健闘を誓いました。北海道カップで（最悪のチーム状態とはいえ）ダブルスコアで完敗した藤波に愛知地区予選で120点取ってトリプルスコアで勝っている若水の力は計りしれず、まずは初戦である八王子第一戦に勝負を賭け、何が何でも勝ちにいきました。1Q、臆する事なくゲームに入れて、21-21と全くの互角。2Qで相手プレスに何回か引っ掛かり4-15と二桁ビハインドとされ前半終了。3QよりDFチェンジングを試みたところ、これが大当たりで相手のスコアリングがびたっと止まり、逆転の流れとなりましたが、うちのインサイド陣がノーマークレイアップを数本含み、イージーショットを連続ミスし勝機を逸しました。それでも4Qに何度も何度も追い付きながらも最終52-60と惜敗。DFチェンジングが成功した3Qのイージーショットミス連発が敗因でした。

続く若水戦、決勝T進出の為には勝つしかなく、相手が優勝候補NO.1であっても逆にただバスケットボールを心こめてやるのみであり、巧く表現出来ませんが、私も選手も気持ち良くゲームに臨めま

した。1Q、19-24とほぼ互角の戦いが出来ましたが、2Qで突放され27-50で折り返しました。最終57-98で完敗。しかし、なんだか悔しいとか残念だとかではなく「フルタイムずっと良い顔で精一杯戦えた」と感じられ、完敗ですが素晴らしいプレイが随所に見られ、私はベンチで楽しく、嬉しかった。

八王子第一戦後も、若水戦後も多くの方々から「素晴らしいチームを創りましたね」「感動しました」「北海道中から選手を集めたのですか？」等の数々の称賛、質問を受けました。予選BL敗退チームにも拘わらず、二つの出版社からインタビューされ、そのうち一社は今夜、ホテルに取材訪問させてもらいたいともなりました。「うちは越境入学している選手はおらず、校区の子達のみであり、ミニバス時代には北海道大会1回戦負けの子供達です」と答えたら、お話したすべての方々信じられないと言ってました。全中出場の殆どのチームは全ミニ(全国ミニバス)の出場経験ではなく、入賞経験者だそうです。でも私には、優れた選手達を越境入学させる力もありませんし、校区の子供達と三年間ただひたすら努力継続するのみです。これまでの私の全国出場チームもすべてそうでした(5回のうち3回はミニ時代に帯広地区での優勝経験すらありません)。

勝負に決して「～たら、～れば」はありませんが、もしエースセンターの大怪我がなかったら・・・、もし全国大会組み合わせが他のブロックだったら・・・と思わないとは言いません。しかし、三年間のチーム創りと努力継続に後悔はなく、何よりも夢の舞台全中で最後まで皆が良い顔で戦い、周りに感動を与えるバスケットボールが出来た事実は私の誇りであり、そして間違いなく子供達にとって一生の財産となると信じ、広島全中の報告と致します。